

忘れられない。  
忘れるはずがない。

どうしてこんなことになったのだろうか。

悲惨な事件現場だった。

場所は巻島町。

都会ではなく、だからと言って田舎と言い切れない、割と、のどかである町。

時間は午後三時四十六分。

私はあの時、喫茶店で全面ガラス張りの見通しの良い席に座っていた。

妻であり、ローカル新聞を作る仕事において重要な写真家の柳沢麗子と次の取材先の打ち合わせをするために彼女を待っていた。

午前中の仕事を終え余裕があった私はウェイトレスがコーヒーを持ってきたことに礼を言い、窓の外を見ていると歩道には四人の子供達が学校帰りなのか、台風間近で豪雨の上  
に雷が酷い中、レインコートと雨傘とで二重対策で雨をしのぎながら歩いていた。

いよいよ台風が来るのかと、思いつつ、コーヒーをすすりながら自分が鞆から取り出して  
おいた持参の小説を読んでいたところだった。

何連続か続けて雷が落ちたのか、光が窓にチラチラ入ったな、と思ったわずか一、二秒  
後、急ブレーキと警報機の音とともに車だろうか？

何かと衝突する大きな音がドン、ドーンと二回、打ち付けた音がした。

それも、私の居た場所からかなりの至近距離で。

私は音に反応したやいなや、嫌な予感がして一目散に喫茶店を出て傘を差し、何かを衝  
突した方へと駆け出した。

予想は的中していた。

喫茶店の隣の家にトラックがのめり込んでおり、家もトラックも半壊状態になっていた。  
更にそのトラックの後ろ左部分にも助手席が見えなくなるくらい跡形がなくなっていた  
白い普通自動車があった。

丁度、急なカーブがあるところだ。

雨の中、スピードを出しすぎていたトラックがカーブしきれなくてそのまま直撃したの  
だろう。

妻はどうやら喫茶店に向かう途中だったみたいで、私よりもっと近場で事故に居合わせ  
たようだった。

彼女が撮ったカメラフィルムには前方からトラックが向ってきている写真が載っていた。  
私や周りに居た人たちは急いで人命救助に向かったが、あちらこちらでうめき声が聞こ

え、中にはすでに動かなくなった人、体の一部のみが路上に残っていた者もいた。

原形さえない半壊した家とトラックの下付近には複数の小さな黄色い帽子に赤い鮮血が飛び散り、オムライスのような配色をしながらも、いまだ振り続ける雨は事件の重さを語りながらも嘆いているように見えた。

必死な人命救助に甲斐もなく、間もなく救急車は来た。

…：後に入った情報によると、トラックに乗っていた二十代の男性運転手とその助手席に乗っていた三十代男性はシートベルトをしていなかったのか、衝突後、正面の窓ガラスを飛び出して頭を打ち、懸命に居合わせた人々が人命救助をしたものの、その場で死亡。

トラックに衝突したその後ろの車には四名の人のうち二十代女性二名と十代一名は軽傷。助手席でトイプードルを抱えていた十代男性一名は前の車と衝突して潰されてしまっていた。

どうやら、破損した家の中には誰もいなかったようだが、トラックに轢かれた人は全員救急車で運ばれたが、全員亡くなった。

あまりにも悲惨な事故で私も当初は何とも言えない痛ましさを感じていたが、不意にあら疑問がわいていた。

しかし、肝心な警察の事情聴衆の時に、私は彼らに助言を言えなかった。いや、言いたくなかったのだ。

数日後、警察側の方は、私がこの件は殺人事件だと想定していることも知らずに、捜査はただただ事故現場だけに焦点が展開される事になり、今回の件は交通事故ととらえられてしまった。

ニュースやメディアでも、割と大々的に報道されていたが、数日たつていくと、人々の関心は徐々に薄れていき、結局、公の場では水に流されたようになり、亡くなった人の遺族にのみ癒えない傷が残ったようだった。

けれども、私にはすべてを悟れる環境が整っていた。

これは、間違いなくたまたま起きた交通事故ではなく、計画的な殺人事件だ。

犯人がどうしてこのような行動に移したのか大抵、わかる。

ただ一つだけ、他の人を巻き込んだ事だけはなぜなのか理解がつかない。

犯人は自殺をしたかった。ただそれだけなのである。

しかしどうして、自殺でなく他人まで巻き込む必要があったのか。

私にはわからない。

忘れられない。

忘れるはずがない。

どうしてこのようなことになったのだろうか。

もし、犯人について誰かが聞いたとしても私からは語れることは何もない。

このことは、私は死んで墓場まで持っていくまで誰にも話さないつもりでした。

それがたとえ、遺族の方だとしても……

最後になりますが、亡くられたご冥福を祈ります。

そして、亡くなった方、遺族の方、共々に私は真実を隠し通すことに謝らなければなりません。

本当にごめんなさい。

私が証人となれば、間違いなく事件は真実にたどり着けたはずです。

真実さえわかっていたら、少しでも気が楽になっていたでしょうか？

私は頭では理解していましたが、行動に起こす気にはなりませんでした。

そこまで思っただうして、私が証人として出なかったという点、

なぜなら、それでも私は妻を愛していたのです。